

私の3冊

- 新明正道・田野崎昭夫・鈴木広・小山陽一・吉田裕, 1959, 「産業都市の構造分析」『社会学研究』第17号(特集 都市調査研究), 東北社会学研究会
- 竹内利美編, 1963, 『東北農村の社会変動——新集団の生成と村落体制』東京大学出版会
- 菅野正・田原音和・細谷昂, 1975, 『稲作農業の展開と村落構造——山形県西田川郡旧京田村林崎の事例』御茶の水書房

細谷 昂(東北大学名誉教授)

※ 1 新明正道・田野崎昭夫・鈴木広・小山陽一・吉田裕「産業都市の構造分析」

青年社会学徒が取り組んだ総合社会学の都市調査研究

私が東北大学文学部に入学したのは1953(昭和28)年, 専門課程の社会学専攻に進学したのは1955(昭和30)年だった。社会学の担当教授は新明正道先生, 人も知る理論社会学の泰斗である。したがって授業も, マックス・ウェーバー, ジンメル, 高田保馬などヨーロッパや日本の社会学理論を次々に取り上げて, ご自分の「総合社会学」の立場を論証する, という内容だった。自分で社会調査をなさったことはなかったと思う。だから, 社会調査に関する授業はなかった。しかし, 戦後になって, 社会学は社会調査をしないとけないという考えをおもちになったようで, 科学研究費を申請しては, 弟子たちに調査をすることを薦めた。こうして新明研究室の社会調査は, すでに各地の大学に就職している先輩たちも含めて, 農山漁村・都市など様々な対象に及んでいったが, しかしそれら調査の企画・実施はほとんど弟子たちに任せていた。

私自身学部学生時代は, いくつかの社会調査に調査員として参加したが, 大学院の修士課程に入って, 予備調査や補充調査に連れて行ってもらい, 学部学生の調査員をまとめる班長格で参加したのは1957(昭和32)年の釜石調査だった。中心は当時旧制の特別研究生だった田野崎昭夫さん(のち中央大学), 新制の大学院博士課程の鈴木広さん(のち九州大学), 小山陽一さん(のち立命館大学), 吉田裕さん(のち明治学院大学, 上智大学)の4人だった。まだ若いこの4人が立案し, 計画を立て, 学部学生を引き連れて実施したのがこの釜石調査だったのである。その成果が, 「私の3冊」の第一冊目『社会学研究』の特集号「産業都

市の構造分析」である。

新明先生は「はしがき」のなかで, この調査の分析図式を「多分に試論的なもの」としておられる。それは, 産業都市釜石を「経済過程」, 「媒介過程」および「政治過程」という3過程によって形成されるものとして分析している点である。このうち「媒介過程」とは, 具体的には, 集団参加, 政治意識などで, 「はじめ社会過程とする案もあったが, ……総合社会学の立場からこれら3過程全体を社会過程とし, この部分は適切な名称がなくて媒介過程となった」という(田野崎昭夫「新明社会学と釜石調査」(上), 新明社会学研究会編『新明社会学研究』第9号, 2004年12月, 61頁)。やがて日本の社会学でも, 北大の布施鉄治さんグループの「炭都夕張」の調査など産業都市の調査研究が取り組まれていくが, この「釜石調査」は, 産業都市の「構造分析」としては日本社会学において嚆矢をなすものであり, とくに産業都市の「構造」を「総合的」な「社会過程」としてとらえる方法的立場において, 今日でも学ぶべきものを含む成果であると思う。

※ 2 竹内利美編『東北農村の社会変動』

東北農村における「新集団の生成と展開」

東北大学は新制になってから教育学部を設置したが, その社会教育学講座に竹内利美先生が赴任してこられた。村落調査に多くの経験と豊富な蓄積をもつ達人であり, 名人だった。竹内先生は若い頃, 信州の小学校の先生をしておられ, 教え子の子どもたちに自分が住む山村生活について調査し報告書を書くように指導した。子どもたちを「よき村人たらしめる」という狙いからである(竹内利美, 1948, 『小学生の社会調査』日光書院)。この仕事は, 瀧澤敬三の「アチックミュージアム」の彙報『小学生の調べたる上伊那川島村郷土

史』として1934（昭和9）年に刊行されたが、戦後になって上掲の単行本として出版された。

竹内先生は東北大学に赴任されてからは、教育学部だけでなく文学部社会学の卒業生や研究室員をも含めたチームを率いて多くの農山漁村の調査研究を実施している。上に掲げた編著はその一冊だが、とかく東北村落を「守旧と停滞」という観点から捉えようとする学会やジャーナリズムの態度に対して、それを「変動」の観点から「新集団の形成過程」として捉えた貴重な成果である。戦後日本の社会科学各分野では「封建遺制」論争が展開されていたが、竹内先生は、子どもたちを「よき村人たらしめる」という狙いで指導なさったその初心から、「封建遺制」云々とは全く異なる立ち位置にあり、その観点がここにも生きているのである。

※ 3 菅野正・田原音和・細谷昂『稲作農業の展開と村落構造』

汽車の中の7時間で学んだ社会調査

社会調査で私が初めて庄内農村を訪ねたのは1961（昭和36）年、大学院の博士課程のときであった。その後たびたび庄内をお訪ねするようになるが、その多くは菅野正・田原音和両先輩との共同調査によってであった。テーマは当時庄内地方に燎原の火のように広がりつつあった「水稻集団栽培」。農地改革によって新しいスタートを切った稲作農業が、農業機械化の予兆を前にして「農業の曲がり角」などといわれた頃である。同じ米作地帯の新潟県蒲原では請負耕作が始まっていたのに、庄内では部落ぐるみの集団栽培が普及し始めていた、それはなぜか。農業経営学などでも盛んに議論されていたこの問題を、社会学の立場から庄内における村つまり部落の独自性から解こうとしたのである。

リーダーの菅野さんの方針で、3人の役割をあらかじめ割り振ることはせずに、3人が一体になって取り組むことにしていた。面接もいつも3人一緒に行った。交通機関は仙台から汽車（蒸気機関車が牽引する汽車である。やがて気動車が出てくるが）だった。「もがみ」という名の急行で片道約3時間半、往復7時間。往きは今回の調査の計画、行く予定の部落などの話だった。帰りは調査の結果についてどう考えるかを論じ合い、これか

らの調査の進め方などについて話し合った。社会調査の駆け出しにすぎなかった私にとって、この往復7時間が、貴重な社会調査の勉強になった。「私の3冊」の3番目に掲げた共著は、そのような3人の庄内調査の最初の著書である。村落調査の方法、歴史的にみる観点など、調査マンとしての訓練を受けたのは、この3人一緒の調査行によってであったと思う。

調査報告書こそ社会調査の教科書

以上、私自身の社会調査経歴に関わらせて、「私の3冊」とさせていただいた。社会調査に習熟するためには、社会調査法の本を読んだり授業を聞いたりすることも大事だが、何よりの早道は自分で社会調査を実践することである。そのなかで先生や先輩から教えてもらうことである。だから社会調査協会の資格認定でも、実習を重視している。

本を読むとしても、実際に行われた調査の報告書を読むことが役に立つ。しかも、その結論を学ぶだけではなく、企画段階から実施、そして集計、分析、報告書執筆など調査の過程に即して、実践的な観点から読み取ってほしい。

とくに、事例調査を行う場合には、先行研究のモノグラフを十分に読み込んでほしい。モノグラフは、統計的調査と違って、対象のもつ諸側面、諸条件をできるだけ多面的に捉えようとする。

しかしむろんすべてを知ることはいできない。そこには一定の捨象を加えざるをえない。だからその調査主題に関して、どのような側面を取り上げ、どのような側面を捨象しているかを先行研究のモノグラフから学んでほしい。

上に紹介した「3冊」は、いずれも事例地域に関わるモノグラフである。第一の「釜石調査」では、総合をめざして、「経済過程」「媒介過程」「政治過程」という3側面に焦点を当てた。第二の調査研究では、「守旧と停滞」の代表のようにみられていた「東北農村」について「新集団の生成過程」に光を当てている。また、第三の「集団栽培」調査では、農村の「伝統的」集落が、トラクター導入という新しい稲作農業の1ページを開くのに貢献していた。このように調査に当たって何を主題にするのか、そのために何を知らなければならないか、という対象のもつ多様な側面への接近の仕方を学んでほしい。